

第7室

(1) 15:30～16:00 (2) 16:10～16:40
(3) 16:50～17:20 (4) 17:30～18:00

第7室(1)

SNS X

小学校外国語科の Small Talk における指導者の役割に関する一考察

—児童の誤り等への対応—

中野 聡（北陸学院大学）

文科省は、「話すこと〔やり取り〕」に関わって「Small Talk」の実施を小学校外国語科において促している。Small Talk の効果、話題設定の工夫、クラス全体での進め方・配慮事項について実践や調査が進んでいる。一方、Small Talk において、児童の沈黙や発言の誤りなどがあった場合、指導者がどのように働きかけをすることが可能なのか、実際にどのように働きかけをしているかという現状に対しては十分な調査があるとは言えない。

そこで、本発表では、まず指導者にはどのような働きかけが可能なのか文献から整理する。また、指導者Aが複数の児童とそれぞれ個別に行った Small Talk の会話分析を行った。この会話分析から、実際の Small Talk において、児童と指導者が Small Talk を行った場合、児童のどのような沈黙や誤り等に対して指導者のどのような働きかけが行われているのか分析した結果を報告する。調査から明らかとなったことは、①誤り等に対する働きかけとしては、リキャスト（recast）、明示的訂正（explicit correction）、明確化要求（clarification request）、メタ認知的修正（metalinguistic feedback）、誘導（elicitation）、繰り返し（repetition）などがあること。②指導者Aと複数児童との会話分析によれば、指導者は児童の多くの誤り等に気づき、即興的に対応しようとしていること、またある特定の働きかけを使用する傾向にあること、などが明らかになった。これらの調査結果から、指導者の授業改善、指導力向上のための視点が提供できたらと考える。

第7室(2)

二次元仮想空間の活用による授業内ポスター発表の課題克服

天野 修一（広島大学）

本実践報告は、プレゼンテーション授業の最終段階に教室で発表会を実施する際の「悩み」の解消を意図し、教室の代わりに二次元仮想空間を用いて発表会を行った実践について報告するものである。プロジェクターが一つしかない教室でのスライド発表会の場合、一人ずつしか発表できず、短い発表が1回ずつできるだけになってしまうこともある。しかし、そのような少ない発表機会では英語によるプレゼンテーションスキルを向上させられるだけの経験を積むことは難しい。そこで、複数同時進行のポスター発表会を案出した。ただし、平時であれば、ポスター発表会を教室で行うことが可能だが、コロナ禍では「3密」の回避や急なオンライン授業への変更に

も対応しなければならない。そこで、複数同時進行のオンラインポスター発表会を、二次元仮想空間を使って行うことを計画した。英語を媒介言語とする対象のプレゼンテーション授業は、抽選で20名の学生が受講した。仮想空間システムは、同時に発表できる人数、同時に空間に入れる人数という観点から Gather を採用した。指定範囲外に音声漏れ機能を利用してポスタースタンドを作成し、そこで発表を行う形を取った。受講生を5名ずつ4つのグループに分け、4回のレッスンをを使って、各グループをレッスン1と3の前半で3回ずつ発表、レッスン1と3の後半で3回ずつ発表、レッスン2と4の前半で3回ずつ発表、レッスン2と4の後半で3回ずつ発表、に割り当てた。発表担当でないときは聴衆として発表を聞いた。これによって、学生は6回の発表を経験し、18回の発表を聞くことができた。アンケートの結果、二次元仮想空間を用いたポスター発表会は、対面授業が実施できない場合の代替的な実施形態として、学生から高い評価を受けた。当日の発表では、詳細な実施手順と、授業担当教員として発表者が気づきたいいくつかの課題や解決策候補を併せて報告する。

第7室(3)

SNS X

小学校外国語科における話すこと【やり取り】の力を育成するための段階的指導

乗富 智子(金沢市立南小立野小学校)・滝沢 雄一(金沢大学)

本発表では、6年生を対象とした話すこと【やり取り】の力を育成することを目指した授業実践について報告する。

これまでやり取りの指導においては、主に教師による質問や反応のモデルの提示や明示的指導、表現のリピートによる練習などを行ってきた。しかし、表現が十分に定着しなかったり、提示された言語材料のみを使用したりして、場面や相手の発話に応じた適切な質問や反応ができないなどの課題が見られた。

そこで、My best memory of Sports Day「運動会の思い出を伝え合おう」(Crown Jr. 6. Lesson5 It was green. 春と秋を比べて)という単元を設定し、話すこと【やり取り】を中心に学習することとした。やり取りを継続するためには、相手の話を受けて感想を述べたり、質問をしたり、話題に関連した自分のことを話したりすることが必要である。予め用意しておいた自分の思い出を伝えるだけでなく、その場の相手の話に応じて、適切にやり取りが継続できることをめざした。そのために、具体的な手立てとして、small talk やモデルなどで、十分なインプットを与え、運動会の思い出について話したりやり取りしたりする時に必要な言語材料に気付くことができるようにした。加えて、すぐに児童同士でやり取りさせるのではなく、教師同士のやり取りを聞かせる、児童を巻き込んで一緒にやり取りをさせる、児童同士でやり取りをさせるという段階的な指導を行った。児童同士のやり取りにおいては、相手を変えながら複数回やり取りを行えるようにした。

上記の実践について、指導の詳細、及び段階的指導を通して見られたやり取りにおける児童の発話について報告する。

小学校での英語パフォーマンステスト結果からみえた「話す力」の現状

松村 百合野（株式会社ベネッセコーポレーション）

渡邊 頼子（株式会社ベネッセコーポレーション）

本発表では、全国で実施された小学校の5・6年生向け英語パフォーマンステスト『Speaking Quest』の21年度のテスト結果をもとに、教科化2年目となった小学校5・6年生において、英語の「話す力」の定着度の現状を報告する。

本調査の検証元となるテストは、新指導要領の言語材料や言語活動における評価観点ごとに
出題される単元を、各学校の先生が履修状況によって自由に選択し、学校のPC・タブレット
端末でクラス一斉実施を行う「話す力」を測る学期テストである。端末に録音された児童一人
ひとりの回答音声は、問題ごとに自動採点AIで3段階に即時判定される。点数は実際の会話場
面で伝えたい内容が回答できているものを2点、伝えたい内容は明瞭ではないが回答でき
ているものを1点、無回答や完全不正解を0点とした。テスト受検者は、21年度に実施され
た結果の中から、5年生1学期959名、2学期927名、3学期900人。6年生1学期1587名、
2学期995人、3学期1319人、計6,687人。学校で最も多く選択された各学期3単元の結
果考察を行った。正答率の低い問題でどのような回答が多かったか、AI採点機能に付
随するspeech to text機能を用いてテキスト化された児童の回答結果をもとに、いく
つかのカテゴリーに分類し傾向を分析検証した。

考察により、言語材料によって定着度に差があることや、新出表現を含むフルセンテ
ンスでの回答において全体的に難易度が高いことがわかった。一方で、正答率の低い問
題でも既習の言語知識を使って児童が何とか英語で回答している結果から、児童が学
習言語材料の習得過程である様子が伺えた。本発表では、これらの分析結果を報告す
る。またその結果から児童の言語材料習得の現状や指導の上でどのような働きかけ
や足場づくりが有効か考察し、小学校での一貫した評価と指導や小中連携につなげ
ていきたい。